

メガロポリスの提唱者、ジャン・ゴットマンの生涯と業績

谷岡武雄*

序 言

20世紀の後半期、世界の地理学界をリードしたジャン・ゴットマンは、21世紀に入って忘れ去られるどころか、再評価の傾向さえみられる。筆者が名誉会員の榮に浴しているパリ地理学会では、2005年3月27~30日、「ジャン・ゴットマンの地理学の軌道」(L'orbite de la géographie de Jean Gottman)をテーマとする国際学会が開催された。その会場は、学会本部の位置するパリ、南岸地区、サン・ジェルマン大通り184番地の講堂である。

J.ゴットマンは、ソルボンヌ(現パリ大学4、ソルボンヌ)を中心とするフランス学派を、かなり厳しく批判している。これは1950年代後半におけるフランス学派の研究傾向に関してである。それは、

- 1) 地誌重視はグローバルな観点を失わせる
- 2) 生活様式 *genre de vie* の概念はダイナミックでない

の2点からである。私は立命館大学のおかげで、パリ大学ソルボンヌに留学し、休暇期間中は現地調査に汗を流したが、J. Gottmanの批判について、地理学研究所の人たちは、彼はソルボンヌ出身でありながら、というように、いささか皮肉にも聞こえる言葉を発していた。

なにゆえに私は今ごろになって半世紀以前の話を持ち出すのか。わが文学部人文学科地理学教室を中心とするスタッフをはじめ、卒業生・学生の諸君は、日本の地理学界において相当な地歩を固めている。研究施設も以前に比べるとかなり良く整備された。研究手段も充実して来ている。とはいうものの日本の地理学界において発表される研究報告は必ずしも多くはない。またIGUや海外の学術研究雑誌に掲載される研究報告は皆無に近い。

地理学研究は、本来的に国際的であらねばならない。この点の自覚が欲しいのである。縮み指向がわが地理学専攻関係者の間にびまんしてはならない。

私はこういう気持ちから、2007年12月1日、立命館大学地理学会大会にて研究発表させて頂いた次第である。その機会を与えて下さった学会関係者に心からお礼を申しあげたい。

I. メガロポリスとは何か

ジャン・ゴットマンの有名なメガロポリスに関する著書(Megalopolis, the urbanized northern seaboard of the United States, 1961, MIT press, 810p.)は、1961年に出版された。当時は外書購入の事情が悪く、私が所有する原書は、1965年7月25日の入手であった。

ジャン・ゴットマンは、アメリカ合衆国の北東部大西洋岸における多核心的巨大都市化

* 立命館名誉役員、立命館大学名誉教授

地帯をメガロポリスと定義づけている。具体的にはボストンから南西へ、プロヴィデンス～ニューヨーク～フィラデルフィア～ボルティモアなどを経て、ワシントンに至る地帯である。人口は約3,800万。

この地帯には、港湾工業活動が活発な都市が多く、背域へと都市圏が拡大しつつある。そうして相互の都市を結びつけるために、高速道路網および航空路網が整備され、充実している。

世界的にみると、ヨーロッパ西部、ロンドン（イギリス）～ケルン（ドイツ）～リール（フランス）を結ぶ三角地域には、メガロポリスが形成されつつある。

ジャン・ゴットマンの主張にヒントを得た某国立大学教授は、マスコミに受けが良かったことから調子に乗って、東海道メガロポリスなどと主張したことが思い出される。しかし、ジャン・ゴットマンは、1979年末、東京大学で開かれた日仏地理学会のシンポジウムに参加したけれども、日本では東京都市圏が肥大化したこともあって、彼の定義に合わないことから、この点については一言も発しなかった。

II. ジャン・ゴットマンと谷岡との接点

幸いにも、谷岡がジャン・ゴットマンと出会う機会は2度あった。

1回目は、1971年11月16日午後9時からである。この日はパリ地理学会の創立150周年記念式典においてである。式典はサン・ジェルマン大通り184番地に建てられている学会本部の講堂において開催された。その際の登壇者として、日本代表は谷岡武雄、アメリカ合衆国代表はジャン・ゴットマンであった。

私は事前に東京の日本地理学会本部に連絡をとり、その了解を得ていた。しかし、ジャン・ゴットマンがアメリカ代表とは、いささか不審であったが、そのころ彼はアメリカからフランスに、おそらくソルボンヌの講義に招かれていたのだらうと思うと、納得がいく。

なお、当時の記念写真は、私のアルバムの中に貼付されている。

2回目の出会いは、東京においてである。1979年末、東京大学において日仏地理学会が開かれたおり、私はすでに購入していた彼の著書 *Megalopolis* に、サインをしてもらった記憶があり、それを私は書棚に並べて大切にしている。

III. ジャン・ゴットマンの生涯

ソルボンヌ大学出身でありながら、ソルボンヌに弓を引いたとも言うことができるジャン・ゴットマンに関して、2005年3月27～30日、パリ地理学会本部において、「ジャン・ゴットマンの地理学の軌道」(*L'orbite de la géographie de Jean Gottman*)をメインテーマとする国際会議が開催された。参加者はフランスを中心とするヨーロッパ各国および北アメリカに及んでいた。残念ながら日本・中国などアジアからの出席者はなかった。この国際学会での成果は、パリ地理学会の学術誌、*La Géographie*の特別号として、2007年1月号に公刊(310p.)されており、不参加の人びとも容易にその内容を知ることができる。

彼の生涯については、この特別号のおかげで私は詳しく知ることができた。IGUが4年ごとに発刊していた会員名簿によって、私もいっそう詳細に彼についての情報を知り得ている。

1915年10月10日、現在のウクライナ北東境に立地する都市、ハリコフにて、ジャン・ゴットマンは生まれた。そのころ、この都市はロシア領に属しており、ロシア革命の影響を受けざるを得なかったのである。この革命は1905～1917年の長期にわたっていたので比較的裕福な家庭に育った彼にとって、苦難の幼年・少年期を送ったものと考えられる。革命の際に、彼の両親は抹殺されてしまったからである。

このため彼は他の家族とともに他国への移住を余儀なくされた。行く先はフランスであった。

フランスでも裕福なことには変わりがなく、パリ市南岸の都心部に近い住居を入手している。オテル・ド・ラベイ Hotel de l' Abbaye とよばれる中庭のある住居に住むことになった。この住居名を直訳すると「大修道院の邸宅」ということになる。かなり由緒の古い邸宅らしく思われるが、正確な場所はわからない。おそらくパリ大学の近くであったように思われる。

彼はたぶん近くのリセに通い、1932年、大学入学の資格試験、バカロレアを修得した。その種類は「文学」であった。そうして順調に進学して1936年には文学のリサンス(学士号)を得ている。

1936年、ソルボンヌ(現パリ大学4、ソルボンヌ)においては集落地理学では著名なアルベール・ドマンジョン Albert Demangeon 教授(1972～1940)の助手に採用された。そのころヨーロッパおよびその影響を強く受けた日本の地理学界では、農村集落の研究が盛んであった。この場合、集落の形態を孤立荘宅、環状村、列状村などに分類する景観論

Landschaftlehre が支配的で、そうでなければ侵略戦争を支持する危険な地政学 Geopolitik へ傾斜するものであった。私は立命館大学予科においてドイツ語を徹底的に修得したので、文学部に進学したのちドイツ語地理学書を読むことができたが、どうしても心が満たされなかった。戦後、私は恩師藤岡謙二郎先生の御推挙で立命館大学文学部に専任教員として就任することになったが、その際、藤岡先生は私に対し、「お前はドイツ語ができるから雇ってやる」とおっしゃったことを、今なお記憶している。

そうして戦後、私はドイツ地理学に飽き足らず、フランス語を修得したくなって、広小路学舎から歩いて15分の関西日仏学館に通った。週3回各1時間であったように思う。先生はフランス人ばかりで、慣れるのにかなり時間を要した。おかげで発音は正しく鍛えられた。フランス語に慣れてくると、フランス地理学書の原書を読みたくなる。まずはポール・ヴィダール ド ラ ブラージュ(1845～1918)著の『人文地理学原理』(1922)を、戦後ようやく購入することができた原書(4版、1948刊)と、飯塚浩二訳書(岩波文庫、上下昭和15年刊)とを対照させながら読み進め、次第に慣れて来たので、他の研究者の論文や原書へ手を広げることにした。

中でもアルベール・ドマンジョンの研究は、集落地理学に魅力をいただいていた私にとって、ドイツ学派の景観論とは異なり、形態・景観よりも機能を重視するので、ダイナミックに感じられた。彼の主要な研究成果は、ソルボンヌでは同僚であったエマニュエル・ド・マルトンヌ Emm. de Martonne の手によってまとめられ、『人文地理学の諸問題』(Problè

mes de géographie humain) として、パリのアルマン・コラン社から出版されている(1942)。

彼は農村集落をドイツ流の形態ではなく、集中～分散という人間定住の機能的性格から分析したわけである。

この考え方に魅力を感じた私は、立命館大学のおかげでフランス留学が認められ、アジアやアフリカの各地に立寄りながら、ようやくパリに到着し、ソルボンヌの地理学研究所へ行くことができたのである。幸いにもソルボンヌの地理学科出身で、関西日仏学館でフランス語を私に教えて下さったアンドレ・ブリュネさんが、先方との連絡に骨を折っていただいたのである。ブリュネさんはいったん帰国してパリで外交官の試験を受けて合格されたので、さるレストランで祝杯を挙げたことを覚えている。

残念ながら、アルベール・ドマンジョンはすでに他界しており、その娘婿にあたるエイメ・ペリビユー教授が地理学研究所におられたことは、幸いであった。ペリビユー教授はそのころ人文現象の地図による表現法を研究しておられたが、私にドマンジョンの研究について、いろいろと教えて下さった。また私のフランス・農村研究について御協力いただき、現地調査の際には紹介状さえ与えて下さった。

説明が長くなったが、ジャン・ゴットマンがアルベール・ドマンジョンの助手であったとは、何かの縁と言うべきか。

ジャン・ゴットマンの助手時代、フランスの政情には暗雲がたれこめていた。1940年11月17日、ドイツ軍がフランス各地を侵略し、ベダン政府がナチスに降伏してしまったのである。この文化国家がヒトラーの思いどおり

に処理される。ユダヤ人は悪評高いアウシュヴィッツ (ポーランド領オシヴィエンチム) へ送られ、抹殺されてしまう状況となった。

ジャン・ゴットマンは優れた才能をもつ地理学者であった。視野も広い。当時、ソルボンヌ地理学研究所を主宰していた地形学者のエマニュエル・ド・マルトンヌは、彼を人文地理学の教授に昇格させるように尽力し、彼を強く説得した。しかし、彼はそれに応じないで、ナチスを恐れてアメリカ合衆国へ渡ってしまったのである。

IV. 渡米以後におけるジャン・ゴットマンの活躍

ナチスの支配によって重苦しいふんいきの漂うパリを去り、自由の新天地とでも言うべきアメリカへ渡ったジャン・ゴットマンは、豊かな才能を存分に発揮して講義・講演・研究発表で縦横に活躍した。彼の名著は世界の主要国にかなり知れ渡っていたように思われる。先掲のパリ地理学会誌特別号に掲載された写真が示すように、頭脳明せきで端整な容姿は魅力的で、アメリカでは各方面から注目されたに違いない。

1946年、彼は優秀な学者が集まるジョン・ホプキンス大学に助教授として勤めることになり、この職は1948年まで続いた。

すでに第二次世界大戦は1945年5月のドイツ降伏、同年8月の日本終戦で終結しており、フランスでは思想・表現の自由が回復した。さっそくジャン・ゴットマンはフランスに帰国し、今度は地理学ではなく、パリ大学政治研究所教授として呼び戻されたのである。さらにパリ・ソルボンヌ、エコール・プラティッ

ク高等研究所長に任用されている。私もパリ滞在中に社会経済史学で著名なフェルナン・ブローデル教授（1902～85）に誘われてエコール・プラティックを訪れたことがあるが、ヨーロッパを主とする歴史的諸事件の地図化に取り組んでおり、その成果を拝見して、これでは歴史地理学者の出る幕はない、と思った次第である。ジャン・ゴットマンはブローデルさんの後を継いだ所長ということになる。

このころ彼は、パリとアメリカ合衆国との間を行ったり来たりしていた。いわば国際的ナヴェット navette であった。

1942～61年間、彼はアメリカのプリンストン高等研究所員であった。日本人では初めてノーベル物理学賞を受けた湯川秀樹（1907～81）も1948年にプリンストン高等研究所の客員教授を勤めている。果たして地理学者のジャン・ゴットマンと湯川秀樹とが出会ったかどうかはわからないが、湯川の父は地理学者で京大地理学教室の創始者、小川琢治であったことから推定して、その可能性を否定できない。

ジャン・ゴットマンの名著、『メガロポリス』の初版は、1961年の刊行である。したがって、この画期的著作は、彼のプリンストン時代における研究成果であると、言うことができよう。

その結果、彼は1956～64年に併任していた20世紀フェンドの中で、メガロポリス研究所の所長の座を得ている。

1969年、彼はパリ大学10、ナンテール校に提出した研究物に対し、学位を得た。この点について若干説明を加えると、第2次世界大戦の終結後、フランスの高等教育システムは著しく改革された。その結果、パリ大学は13

校に分けられ、都心部にとどまらず同じ大都市圏内でも周辺部に建設されている。13校のうち、地理学研究が行われているのは、1のパンテオン・ソルボンヌ、4のラ・ソルボンヌ、10のナンテールの3校においてである。ナンテール校は、メトロ（地下鉄）でエトアール駅（シャルル・ド・ゴール駅）で乗り換え、さらに1駅、西へ行かねばならない。

ナンテール校は1968年5月における大学紛争の発祥地である。私は、チェコ国ブルノ市における歴史地理学の国際シンポジウムに出席して、パリ大学10のビュルジェル教授と親しくなった。この際のゆかりでパリではナンテール校に彼を訪問した。地下鉄の近くに立地するキャンパスに入って、たいそう私は驚いた。立看板がすごく多い。学生の主張がいろいろと貼付されている。このキャンパス内の学生食堂の食事がひどくまずい。このことから大学紛争が起こったのである。

私は経験したいからと、学生食堂で中食をとろうとしたが、彼は大学周辺のレストランへ連れて行ってくれた。私も大学紛争ではいろいろもまれて、苦い経験を持っている。ナンテールでこのことを思い起こすとは私も修養が足りないことになる。

学位を得たジャン・ゴットマンは、勢いを増したかのように、そのころ政府の抑圧が強くと、言論の自由はなく、思想・信条の自由さえ認められなかったソ連を訪れて講演を行い、日本まで足を伸ばした。北ヨーロッパ諸国では厚遇を受けたといわれる。

彼はパリに居を構えながら、オクスフォード大学のハートフォード・カレッジでヴィジティング教授として教壇に立った。それは1968年から1983年までの長期にわたるもの

で、その結果、彼はオクスフォードの名誉教授という栄に浴している。

1983年夏、ベルニース夫人とともにイスラエルを訪問している。その折の写真が、先述のバリ地理学会誌特別号に掲載されたが、かなりやつれた印象を私は受けた。満ち足りたという感じもしたように思う。

1994年1月24日、彼はオクスフォードにて生涯を閉じた。偉大な地理学者をわれわれは失ったのだという気がしてならない。彼の遺体はオクスフォードの墓地に埋葬された。

V. ジャン・ゴットマン地理学の基本概念

ジャン・ゴットマンがまだソルボンヌの学生であった1933年から、死去した1994年に至る期間に、彼は370に及ぶオリジナルな論文を学術雑誌に発表している。信じられないほど多くの論文である。使用言語の25%はフランス語にとどまっており、それ以外は英語その他である。語学の才能に長じていたことがわかる。

主著の『メガロポリス』を主とし、他の論文を参考にして、彼の地理学にみられる基本概念を、以下のとおりにまとめてみたい。

- (1) ちょうつがい（蝶番）の構造 アメリカ合衆国北東岸地帯におけるメガロポリスは、ちょうつがいのような構造をもっている。これは、ほぼ北東～南西走の海岸線を軸として、西側は都市化の進んだ陸地、東側は貿易活動が盛んな大西洋であることをさすものと考えられる。
- (2) 中心～周辺空間組織 メガロポリスにおけるすべての都市は、核となる中

心部と、これを取り巻く周辺部とからなっている。都市の人口が多く、経済活動が盛んであればあるほど、中心部の規模は大きく、それに応じて都市圏は拡大されることになる。

- (3) 地理学的運動力学（キネティック、cinétique）これは理解のむずかしい概念である。おそらくジャン・ゴットマンは、地表空間の自然・人文諸事象を、固定的・静態的ではなく、ダイナミックにとらえるべきだと主張したものと考えられる。
- (4) 図像学的循環 あらゆる地表面象は循環しつつ深まっていくような方法でとらえられるという主張である。私にはかつての哲学者、西田幾多郎博士の主張したことを思い起こさせるが、地理的分析にはこういう側面のあることは否定できない。
- (5) 孤立主義と世界主義 世界史において孤立主義をとる国もあれば、世界主義をとる国もある。たとえばイギリスは島国であるため孤立主義になり勝ちであったが、産業革命に成功したのちは世界主義に転じ、優れた海洋国家に生長した。日本は近世に孤立主義に立っていたが、明治維新に成功したのちは一転して世界主義の方向に進んだ。現在のアメリカ合衆国は孤立主義から世界主義に転じた結果、世界のアメリカ化は急速に進行したが、今日ではその弊害が目立つようになっている。
- (6) メガロポリタンの形成 現在のメガロポリスに居住し、あるいは活動の拠点を置く人びとは、メガロポリタンと

言ってよからう。

- (7) 境界の流動性 現在の国境という境界は全く固定しているが、住民の流動性は強く、また物資の移動はきわめて流動的である。境界の流動性の向上は文明の進化の方向を辿るものとみることができる。
- (8) 現在の世界では、ローカルとグローバルとが、引っ張り合っている。ローカルが勝つことになると経済はもとより文化も衰えてしまう。これは世界の歴史が証明するところである。といてグローバルが勝ってしまうと地方は衰微する。これはジャン・ゴットマンが証明している事象ではない。フランス農民がグローバリゼーション反対の運動をおこしているのは、彼らの農産物が十分な販路を確保していないことに起因している。南部の農産物が売れなくなったので、スーパーマーケットを襲撃したのは、こういう事情に起因している。

VI. 結語

世界の地理学史に新しい1ページを加えた、この高まいた学者、ジャン・ゴットマンについて、私の筆は及ばないことを、よく自覚している。まして批判を投げかけるなどはもってのほか、といわれるかもしれない。しかし、

日本のみならず海外の地表空間についてのシステムを永年にわたって研究してきた私にも、発言できるところは、いくつかあるのではないか。それは以下の3点に関してである。

- (1) ジャン・ゴットマンの著作には、政治地理学の傾向が強い点である。地理学は地表空間のシステムを分析する点で、他の学問分野とは異なった特色もっている。自然地理・人文地理・地誌というように、さまざまな研究分野がある。政治地理学は地理学の一つの分野にすぎない。これのみで、他のすべての地表面象を分析することは不可能ではないか。
- (2) ジャン・ゴットマンの主張にはヨーロッパ史、アジア史などの歴史に関する配慮が欠けている。歴史は領主と住民の対立、領主の欲望など、さまざまな要因によって動いていく。こういう歴史を考慮しないで、地表面象について基本概念を設定し、それによってすべてを割り切ろうとするには、無理がある。
- (3) 地理学的研究の出発点は、フィールドワークにある。フィールドワークを欠く地理学の研究は、アームチェア・ジェオグラフィー（安楽椅子の地理学）、つまり空理空論に陥りやすい。ジャン・ゴットマンの地理学には、この恐れがないとはいえない。